

演題抄録

一般演題

1: 日本の小児外科にみられた Quality of Life

金沢医科大学 小児外科 梶本照穂 小沼邦男

小児外科がとり扱う疾患の多くが、ゆくゆくは、Quality of Life と深くかかわらざるを得ないという宿命をもっている。

日本でも、以前から、それを強調する所説や、それを高めようとした研究は少ないながらあった。それらは、まさに、今、言われている Quality of Life そのものであり、それを向上させるための実践であった。

演者は、日本の小児外科で、いつごろ、だれが Quality of Life に、どのようにかかわっていたかを調べ、それらを概観する。

2: 長期入院患者におけるQOLの検討

名古屋大学第一外科、分院外科 原田 徹 渡辺芳夫 村橋 修 赤塚 寛
石黒士雄 伊藤喬廣

当院に生後より長期にわたる入院を余儀なくされている2患児のQOLに関して、現在までの経過を栄養管理およびストーマ・ケアを中心に報告し今後の問題点を検討したいと思えます。症例1: 4歳2ヶ月の男児、総排泄腔外反症に先天性短小腸(約30cm)および十二指腸狭窄症の合併を認め人工肛門造設術、膀胱瘻造設術および恥骨形成術、腸管延長術(Bianchi)等を多期にわたり施行しております。症例2: 3歳1ヶ月の女児、ヒルシュスプルング氏病を疑い横行結腸人工肛門を造設しましたが病理的検討により hypogenesis of ganglia と診断され、高位空腸瘻造設術(Bishop-Koop)を施行しております。2例とも HPN の導入、母親への膀胱洗、空腸瘻管理の指導等により家庭復帰を目指しております。

3: 膀胱腸裂患児のQOLを考える - 12年間を振り返って -

金沢医科大学病院 小児病棟 本田雅子 荻野里美 野崎明美

膀胱腸裂は出生後の管理が困難な疾患のひとつである。今回私達が経験した本症女児例について報告する。

患児は現在12歳、生後4ヶ月で会陰部に肛門造設、2歳で回腸導管を造設した。会陰部の肛門は児の成長と共に自己管理上の大きな問題となってきた為、11歳で腹部の人工肛門とし、回腸導管と合わせダブルストーマでの排泄管理となった。そして管理の面からはQOLが向上したと考えられた。しかし実際は患

児とわれわれの認識にはずれがあって、彼女独自の方法で排便管理を行っており、私達が考えていた排便管理とかなりの違いがみられた。そこでQOLの観点より経過をふり返った結果、看護者側の指導法を反省し、今後なすべき援助のありかたを検討する機会となったので考察を加え報告する。

4: CBA 術後(特に黄疸非消失例)患児のQOLと肝移植

順天堂大学小児外科 福永 研 宮野 武 木村絃一郎 下村 洋 大谷俊樹

胆道閉鎖症(以下本症)に対し葛西手術が導入されて以来、本症の治療成績は飛躍的に向上した。本症の約半数は黄疸が消失し生存可能といわれているが、特に黄疸非消失生存例に関しては、術後に胆管炎を併発し入退院を繰り返すなどその quality of life(QOL)を考えた場合決して満足のいく状態ではない。またこれらの症例は将来肝臓移植が必要となる可能性が非常に高いのは言うまでもない。そこで我々は当科で施行した駿河Ⅱ法症例のうち黄疸非消失生存例の術後経過から、患児のQOLと、それに関連して移植の必要性及びその施行時期に関して考察した。

5: 小児 Augmentation Colocystoplasty 例 - QOLからみた有効性 -

順天堂大学小児外科 下村 洋 宮野 武

二分脊椎症に代表される神経因性膀胱では一般に尿失禁を呈し、著しく日常生活が制約されている。しかも上部尿路にまで異常を来し、腎機能障害が惹起され将来慢性腎不全に至るものもある。私共は、特に膀胱尿管逆流を伴った神経因性膀胱で膀胱の荒廃が著しいものに対して、逆流防止術に加え、膀胱容量の増大を目的に Colocystoplasty を施行している。今回 Colocystoplasty を施行した10例について、排尿動態を検索したところ、興味ある結果が得られたので報告する。対象は二分脊椎症9例と特発性神経因性膀胱の1例で、全例尿失禁を認め、オムツを使用していた。しかし、術後1年以上経過した8例中3例はほぼ自然排尿となり、尿失禁の回数が減少し、オムツではなく小さなpadを使用するようになったものもある。この結果、学校生活や社会生活において飛躍的に快適な生活を送れるようになった。以上詳細を報告する。

6: 成人に達した二分脊椎症のQOL

公立葛南病院小児外科 関 聖史 駿河敬次郎 角田 晋
精神科 赤沢 滋

二分脊椎症の症例を呈示し、思春期、成人期における問題点について検討したの

で報告する。

症例は23才男性。生下時、脊髄髄膜瘤あり閉鎖術施行。膀胱直腸障害、両下肢知覚障害、内反足等を合併する。11才、仙骨部尋創が悪化し形成術施行。同時に排尿障害に対しペニスクレンメを使用。20才、膀胱瘻造設、また同時期、仕事中足底に熱傷を受け、皮膚移植術を施行。

排尿排便障害、歩行障害のため小学校時期よりいじめに会い、中学2年頃より登校も途絶えがちとなり、高校は1年で中退、その後職を転々とし現在に至っている。

7: ヒルシュブルグ病根治術後の排便機能について

大阪府立母子保健総合医療センター小児外科・大阪大学小児外科
井上正宏 窪田昭男 長谷川利路 秦 信輔 福沢正洋 井村賢治
鎌田振吉 岡田 正

ヒルシュブルグ病根治術後の排便機能は比較的良好であるとされているが、一部において長期間にわたる汚染、失禁を認めることがある。今回我々は根治術後に排便機能の障害された患児について、その排便機能、QOL及び治療上の問題点について検討したので報告する。

1982年から1986年までに、排便機能の評価可能な4才に達した15例のヒルシュブルグ病を経験し、全例にSoave-伝田法による根治術を施行した。うち追跡可能な14例について排便機能の評価し、3例に明かな障害を認めた。障害は、頻回の汚染が改善しないものが2例、術後6年を経過して便秘、失禁の増悪したものが1例であった。これら症例において術後排便訓練が不十分であった可能性が示唆された。

8: Permanent Colostomy における排ガス管理の工夫

独協医科大学第一外科 藤原利男 土岡 丘 黒須祐作 信田重光

小児の先天性外科的疾患における人工肛門造設は患児の life saving のための一時的なものであり、根治術終了後は閉鎖される。しかしながら極めて稀であるが原疾患の治療経過から永久的な人工肛門となる場合がある。

今回私どもは19才の男性(2才3ヶ月時、先天性巨大結腸症にて某病院で一期的根治術を受けた)で永久的人工肛門の再造設を行い、その後排ガスのコントロールに悩み、洗腸が極めて有効であった症例を経験したので報告する。年長児、思春期の患児においては人工肛門からの突然の排ガス音は、社会生活において精神的に非常に大きな問題となる。症例を供覧し永久的人工肛門患者でのQOLについて述べる。

要望演題

9: 直腸肛門奇形及び Hirschsprung 病術後排便機能障害児に対する PSARP の有効性

順天堂大学小児外科 徳丸忠昭 宮野 武 木村紘一郎 下村 洋

鎖肛及びH病の根治術後に Incontinence で長期にわたり苦しんでいる患児の数は多い。我々の施設でも十数年前に根治術を受け、その後長期に排便障害で悩んでいる患児がいる。そのうち、14歳の直腸尿道球部瘻術後の男子、11歳の直腸尿道瘻術後の男子、18歳の直腸膈前庭瘻の女子、20歳の Entire colon aganglionosis 術後の女子の4症例と、Cloaca で Permanent sigmoid colostomy 下に10歳まで生活していた女子の計5症例に、PSARP (Pena 手術)を行った。術後排便機能障害の改善に伴う、社会生活、学校生活、家庭生活の変化及び心理的变化について検討する。

10: 高位直腸肛門奇形に対する仙骨式根治術後のQOL

神奈川県立こども医療センター 一般外科 山田亮二 西 寿治 山本 弘
大浜用克 松村光芳 鈴木 誠
角田昭夫(病院長)

仙骨(腹)会陰式根治手術を行って10歳以上となった中間位、高位型患児の現況とその問題点は以下の通りである。

1. 3/4の患児は排便の補助を全く必要とせず、社会生活上問題がない。1/4の患児では排便コントロールのために緩下剤の服用、坐薬、洗腸の使用が必要である。おむつの使用者は一人もいない。坐薬、洗腸の使用をどうしたら減少させられるかが今後の問題である。
2. 尿路の問題としては神経因性膀胱・尿路感染は生じていない。腹圧性尿失禁が少数にみられた。
3. 男児に勃起の障害は生じていないが、逆行性射精が手術と関連しておこる可能性はあると思われる。

11. 直腸肛門奇形術後の排尿機能および生殖機能

京都府立医科大学小児疾患研究施設外科 長島雅子 出口英一 常盤和明
柳原 潤 岩井直躬

【目的】直腸肛門奇形術後の排尿機能および生殖機能について患児あるいは保護者の主観的な訴えに基づいて検討した。

【対象および方法】排尿機能は4歳から21歳までの患児54例（男39例、女15例）を対象にアンケートにより調査した。病型は高位型22例、中間位型9例、低位型23例であった。生殖機能は54例中15歳以上の6例（高位型3例、中間位型1例、低位型2例）を対象に、男児3例は勃起および射精について、女児3例は月経についてアンケート調査を施行した。

【結果】高位型2例を除く全例で正常な尿意が認められ、高位型4例、中間位型2例、低位型2例に下着の尿汚染が認められた。15歳以上の男・女児の生殖機能は正常であった。

12：直腸肛門奇形術後の排便機能

京都府立医科大学小児疾患研究施設外科 出口英一 長島雅子 常盤和明
柳原潤 岩井直躬

【目的】直腸肛門奇形術後の排便機能に関する長期予後を主に患児および保護者の主観的な訴えに基づいて検討した。

【対象および方法】4歳から21歳までの54例（男39例、女15例）を対象とした。病型は高位型22例、中間位型9例、低位型23例である。排便機能の調査はアンケートにより行い、54例中29例は直接面談による調査も行った。直腸肛門奇形研究会案によるスコアを用いて臨床的排便機能を評価し、更に各患児の現在の排便機能に関する訴えを個別に検討した。

【結果】高位型の排便障害は便秘よりも失禁、汚染が多かったが、年長児では改善傾向が認められた。中間位型および低位型では幼児でも高スコアのものがほとんどを占めた。

13：鎖肛術後症例における排便状況の検討

千葉大学小児外科 岩井潤 高橋英世 大沼直躬 田辺政裕 吉田英生
新保和広

鎖肛症例のQOLの向上には、治療の進歩による排便機能の改善は勿論であるが、それにも増して術後の長期にわたる排便・生活指導の向上も重要と考えられる。

そこで今回は、今後の術後指導改善の参考とするために、当教室で経験した鎖肛症例において、現在の排便状態について、臨床的な排便機能評価を行うとともに、生活状況を社会（学校）生活を含め検討し、鎖肛術後症例のQOLにつき評価した。また、術後問題になると思われる下痢時の失禁の有無や程度、汚染の有無や程度とそれらの社会生活への影響、その対応についても検討を加え報告する。

14：直腸肛門奇形術後QOLの検討

日本大学第一外科 岩田光正 岡部郁夫 越永従道 萩野強幸 武豪
森田建

直腸肛門奇形術後におけるQOLには、排便機能が重要な点である。また本疾患では泌尿器異常の合併により、患児のQOLも影響をうける症例もある。

我々は教室にて経験した直腸肛門奇形症例を対象として、主に術後の排便機能がQOLに及ぼす影響を検討し、さらに患児および両親に手術後現在までの患児の学校生活・家庭への影響などについてアンケート調査を行った。今回、その結果を報告する。

15：直腸肛門奇形患児の精神知能発達

秋田大学第一外科 中通病院小児外科 菅藤啓 加藤哲夫 蛇口達造
小山研二

1978年5月より1982年11月の間に直腸肛門奇形で治療を開始し、6歳1ヶ月から10歳4ヶ月に達した13例に、Bennder-Gestalt テスト（以下BGT）及びWISC-R 知能検査（以下WISC-R）を施行した。病態別に分類すると高位3例、中間位5例、低位5例であり、検査時の排便機能の分類ではgood 6例、fair 6例、poor 1例であった。同時期に治療した同年齢に達した外鼠径ヘルニア、肥厚性幽門狭窄症をコントロールにすると、直腸肛門奇形の症例はBGT、WISC-R いずれも成績が悪かったがその傾向はWISC-Rに強く認められた。各病型別、及び排便機能別にはBGT、WISC-Rとも差がないことより、術後排便機能がその主原因とは考えがたく、またいずれの症例も言語性IQが動作性IQより劣っており特徴的であった。

16：ダウン症を合併した鎖肛患児のQOL

九州大学小児外科 生野猛 水田祥代

17：直腸肛門奇形術後患児の日常生活適応状況と術後指導のありかた

長崎大学医療技術短期大学部 宮下弘子
長崎大学第一外科 黒崎伸子

直腸肛門奇形の根治手術を受け、現在長崎大学第一外科でfollow upしている患児を対象に、術後の日常生活適応状況についてアンケート・面接により調査を行った。

調査内容は、現在の排便状況、排便コントロールの方法、学校生活の状況、日常生活上の制約、日常生活に適応するために工夫している点などである。

さらに、術後10年以上経過した高位鎖肛症例について、日常生活における排便コントロールの経過を詳しく検討し、患児・家族のQOLを考慮した今後の術後指導のありかたについて、若干の文献的考察を加えて報告する。

18：思春期を迎えた鎖肛患児のQOL評価

金沢医科大学 小児外科 小沼邦男 河野美幸 野崎外茂次 伊川廣道
中村紘一郎 梶本照穂
神経科、精神科、心身医学科 榎戸美佐子 平口真理 北本福美
川原真理 鳥居方策

教室開設以来15年間に108例の鎖肛を経験したが、そのうちで12歳を越えた36例に対し、アンケート方式によるQOL評価を行った。調査内容は、排便機能、健康度、家庭生活、学校生活、余暇利用、地域社会での活動など、詳細、多岐にわたった。排便の項以外は、共同研究者である専門家が設問と分析にあたった。評価法は、同年代の中学生を対照とした相対的評価とした。

19：直腸肛門奇形症例学校生活の諸問題

国立小児病院外科 羽金和彦 佐伯守洋 中野美和子 川瀬弘一 下野隆一

小学校入学以後に当科外来を受診した直腸肛門奇形症例は233例で、その内訳は小学生105例、中学生63例、中卒以後55例であった。

上記症例の診療録から、患児の学校生活上、問題となると思われる記載を集めた。それらは、①汚染、失禁、便秘などの排便機能に関する問題、②自由にトイレにいけないなどの集団生活に関する問題、③神経症、精神発育遅延などの合併症に関する問題の3つに大別された。

以上の検討から、鎖肛患児のQOLの向上には適切な排便管理方法の指導と周囲の特に家族と学校関係者の理解と協力が必要と思われた。

20：成長期における直腸肛門奇形術後のQOL

愛媛大学医学部第二外科 青野幸治 高橋 広 加州保明 俊野敬英
窪田正幸 木村 茂

(はじめに)成長期の患児の性格人格に重大な影響を与えるのは両親であると考え、アンケート調査を行った。(対象)1977年～1990年の間に経験した直腸肛門奇形46例の両親および患児(中学生以上)。(項目)疾患に対する知識、術後の処置、就園、就学時の問題、informed consentの取り方、将来に対する不安、それらの解決策等。(結果)両親から34例、患児(中学生以上)から7例の回答がえられた。両親の疾患に対する関心度は高いが理解度は低く、ただ医師の注意事項を守っていればよいと考えている両親が多く、医師は両親にもっとinformationを与える必要がある。また患児の疾患の型、合併疾患、年齢により両親、患児の苦勞や悩みが異なり、その解決には医師、両親、学校の先生の協力の必要性を痛感した。

21：直腸脱に対しRipstein手術を施行した直腸総排泄腔瘻術後の成人女子例

東北大学小児外科 千葉敏雄 曾 尚文 神山隆道 松本勇太郎 林 富
千葉庸夫 大井龍司

患者は21歳の女性である。直腸総排泄腔瘻や重複膈があり、新生児期に人工肛門造設術、1歳2カ月時に腹会陰式の肛門形成術を行った。その後遠隔地居住のためもあり、外来通院は殆どしなくなっていた。21歳時に当科を再受診した際には既に社会人として生活していたが、直腸脱による下着汚染の問題や結婚を控えての外陰部形態異常などの問題を抱えていた。当科にて段階的に膈形成術や直腸脱の手術を行ったが、後者については最終的にRipstein手術を施行した。現在は思春期来の問題はほぼ解決し、QOLの向上を得ている。この患者の経過につき若干の考察を加えて報告したい。